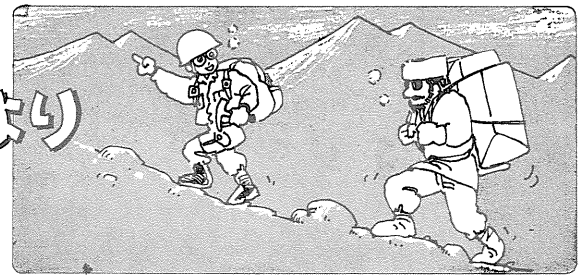
海外室だより



No. 21

海外室を去るの弁

昭和57年1月末にサウジ・アラビアから帰国して海外室に戻り　窓ぎわに座りつづけること丸5年　2月から技術部特殊技術課に移りました.

もともと出身母体の技術部への里帰りですから　あまり異和感はありませんが　昭和44年から53年まで　サウジに出入りしている間　河田町で在室した3年間を合わせて8年間お世話になった海外室は　まさに第一の故郷となって　ノスタルジイは禁じ得ません.

文化財的　天然記念物的建造物であった河田町庁舎4階の海外室での3年間は　主として地下水開発集団研修のお世話と　始まったばかりの環太平洋マッププロジェクトの事務局を務めました.　今はすっかりルーチンとなり　洗練された紳士・淑女が参加している集団研修も当時（昭和44年　第3回生）は試行錯誤の時代であり　赤毛布（あかげっと）談　武勇伝には事欠きませんでした.　パンツをはいたまま　那須温泉の大浴場に入り　どうしても脱がなかった中東の研修生　石鹸の泡まみれで浴槽にとびこみ　中の老人に怒鳴られたアフリカの青年なども　伝え聞くと今は部長となって　母国の地下水開発のトップとなり　飢えるアフリカよりの自助努力による脱出の文字通り機関車となって活躍しているようです.

私がお相手した訪問者

年度（昭和）	57*	58	59	60	61**	合　計
中　　国	7	120	127	325	106	685
米　　国	1	17	97	20	60	195
東南アジア	19	104	142	105	59	429
中　　東	0	32	17	36	16	101
アフリカ	1	36	34	36	37	144
中・南　米	2	38	64	38	39	181
ヨーロッパ	8	73	18	73	55	227
オセアニア	0	11	12	13	11	47
国　　連	0	6	16	6	0	28
計	38	437	527	652	383	2,037

＊ 58.2.26〜3.31　　＊＊ 61.4〜62.1

また　夜の国際親善が進行しすぎて　一週間も行方しらずになってしまった研修生も居たりで　そういう強い個性の面々の珍談　奇談が18年経った今も　時の経過を感じることなしに憶いおこせてきます.

次に　サウジ帰国後の海外室では　もっぱら接客業に明け暮れました.　すでに筑波移転後2年を経過して所の機能も交通機関もすっかり軌道にのり　海外からの訪問者は鰻のぼりに増加の一途を辿っていました.　因みに　移転前の昭和54年度は22か国　78名に過ぎなかったのが　移転後の56年度は51か国　246名に増加しております.　下表は当所が受け入れた外国人訪問者の年度別　国または地域別の人数です.　この人々のほぼ全員の当所での受け入れを私が担当しました.　5年間で約2,000名の方々と握手し　名刺を交わし　所の説明をし標本館を案内したわけですが　みなさま満足して帰国なされたことを確信しております.　これは筑波の理想的な環境　研究者の真摯な態度に相まって　すばらしい標本館が強い感銘を与えるのでしょう.

訪問者の国籍は70か国を越えていますが　なかにはバチカン市国法王庁の代表という珍らしい方の御来訪もいただいております.　香港　シンガポールを訪ねたことのある方は先刻御承知のタイガーパーム・ガーデンの所有者である世界的富豪の華僑大財閥胡暁子夫人とも　標本館を案内のあとに握手をしていただく役得にありついたことも忘れられぬ思い出です.

技術部に移りましても　未だ屯田兵　若い人に理解ができなければ在郷軍人　それも解らなければ予備軍として　いざ鎌倉のときには標本館へ馳けつける心構えはできております.　なお　訪問者の研究室見学で御協力をいただいた研究者の皆さまに紙面を借りて心からの御礼を申しあげます.

（桑形久夫）

〔追記〕 上記の中で　御本人は触れておられませんでしたが　桑形さんが海外室で果された業務の中で忘れてならないのは　海外渡航者のための公用旅券取得のための申請手続です.　実際の窓口は無論人事係ですが　提出

書式の草稿づくりは　慣例的に当室が受持ってきています．　数の上では先の表の応接者数には及ぶべくもありませんが　ここ数年間の海外渡航者数は急増してきており　これらの当所員は必ず桑形さんのお世話になっているはずであることを強調しておきたいと思います．

常に明るくダンディな桑形さんのキャラクターは　単に海外室だけに止まらず　対外的には GSJ を代表する顔のひとつとして広く親しまれてきたところです．　御本人のお言葉通り今後の御協力を願いつつ　永年の御苦労に心から敬意を表する次第です．　（海外室一同）

昭和61年度 ITIT フェローズ

61年度の ITIT 特研は　耐火物資源—中国　油・ガス田層序対比—フィリピン　第四紀地殻変動—トルコ（以上継続）　石炭特性-中国（新規）の４テーマが実施され　相手国から総数８名のフェロー研究員が来日し　それぞれのテーマでの共同研究を行いました．

各テーマのグループ長は　相手国の責任者と密接な連絡をとりながら　その年度の招へい者名　時期　期間等を固めて行くわけですが　相手側機関の事情や招へい者の個人的理由などにより　なかなかスンナリとは運んでくれず　グループ長はもとより　窓口となる当室も少なからずヤキモキさせられるのが通例です．

今期も例年にもれず　トルコが予定の半分の期間しか滞日できなかったり　中国（石炭）の到着日が直前になって再三変更になるなど　フェローの招へいは本人の顔を見るまでは気の抜けない作業です．　加えて　今期は２件の研究管理者招へい（いずれ別稿で紹介します）も予定されていたため　イライラは倍増でした．　ともかくも　３月13日に最後の研究員を無事に見送ったところで今期に来日した研究員の紹介方々　今年度の招へい作業を振返ってみることにしましょう．

写真-1　標本館の前での記念スナップ
右：サマニエゴ　左：アガデイエールのお２人（フイリピン第１次）．　小沢事務官提供．

本年度のトップを切って来所したのは　フィリピン鉱山地球科学局（BMG）からのサマニエゴさん（Remedios Samaniego）とアガディエールさん（Maybellyne Agadier）で９月24日の到着です．　お２人とも女性ですが　サマニエゴさんは BMG の層序・古生物課長を務める大ベテラン　アガディエールさんは未婚の若手研究員という対照的な取合せでした．　彼女らの来日直後　BMG の属する天然資源省は　一時的に全職員の海外渡航停止処置をとったため　危ういところで計画変更を免れました．

名取課長以下主として石油課のメンバーと共同で　日比油・ガス田地域の地質及び標準微化石の比較研究を実施し　10月17日に帰国しました．

続いて11月15日には　耐火物の方の中国からの研究員を迎えました．　張天楽(Zhang Tian-Le) 蔣伯昌（Jiang Bo-Chang）のお２人で　それぞれ　地質科学院砿床地質研究所の高級工程師と江西省地質砿産局実験測試中心の研究員です．　中国は招へい業務を行うのにヤッカイな国の最たるものですが　本件は　直前に鉱床部の須藤技官が共同研究のために訪中してきたばかりでもあり　予定通りに計画が運ばれました．

35日の滞在期間中　主として須藤技官の応接により野外調査および室内実験に従事し　58年度から続いてきた本プロジェクトの締めくくりを行いました．

同じく中国のもうひとつの協力プロ（石炭特性）では武漢地質学院から　王生維（Wang Sheng-Wei）　庄新国（Zhuang Xin-Go）のお２人を招へいしました．　前述のフィリピンと中国との協力でも２名ずつの招へいを行な

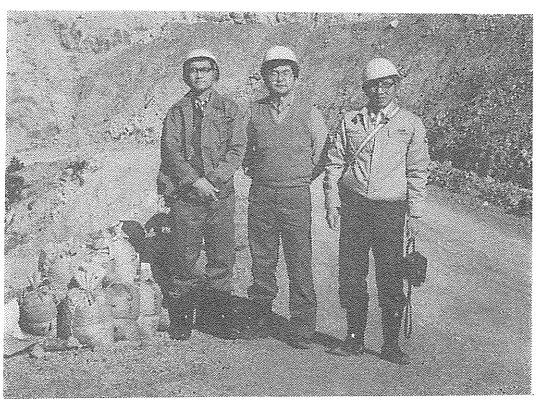


写真-2　石川県服部鉱山を調査中の左から張さん　須藤技官　蔣さん（中国・耐火物）．須藤技官提供．

いましたが　いずれも1名分は滞在費だけの支給でした．　本件は今年度からの新規プロであり　久々に2名分の旅費と滞在費の支給が認められました．　当初は1月12日から45日間の招へいを予定したところ　直前になって2回の順延申入れがあり　結局　後述するトルコからのフェローと同じ　1月21日の到着となりました．
この間　当室はもとより　受入れ担当の燃料部の藤井課長も国内での実習先との変更連絡等に振廻され　先の中国からの場合がスムーズに行っただけに　ある意味ではやっと中国らしくなったと思ったりしたものでした．
その代償かどうか　先の2人の中国人はほとんど英語が話せずに須藤技官が苦労したのに比らべて　今回の王さんの方は比較的英会話に支障がなく　その分は藤井課長が楽をしたといえるでしょう．　昨年事前協議のために来日した中国地矿部ミッションに強く要望しておいた事の結果のひとつとして　大変に喜ばしいことでした．
主として石炭課における共同研究の結果は　協力の初年度としては実り多いものであったようです．　3月6日の帰国までに　立派な報告書をまとめ上げました．

1月21日に来日したもう一方のフェローは　トルコ鉱物調査開発研究所のエレンデル研究員（Murat Erendil）です．　本件の当初招へい予定期間は60日でしたが　本人の都合により約半分しか滞日できない旨の連絡が入っていました．　例によって1名分の旅費をトルコ側が負担する形での2名の招へいを交渉してみましたが　遠距離でもあり　相手側に経費の余裕のないことから　結局先方の希望通りの日数で受入れることにしました．
衣笠課長を始めとする環境地質部の研究者と一緒に野外調査も含めた第四紀地殻変動の日土間の比較研究を行い　2月19日に帰国の途につきました．

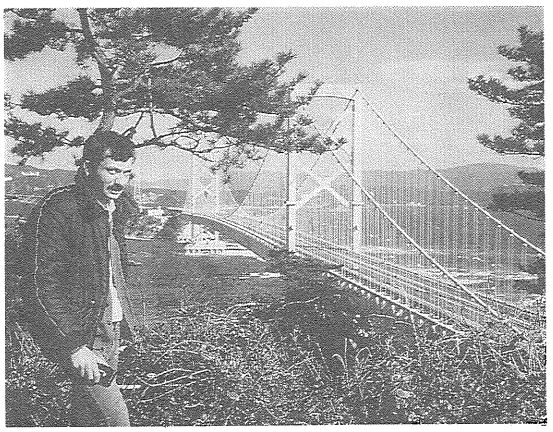


写真-4　大鳴門橋を見学するエレンデルさん．　トルコでもイスタンブール架橋（ボスポラス海峡）の計画がある．　衣笠技官提供

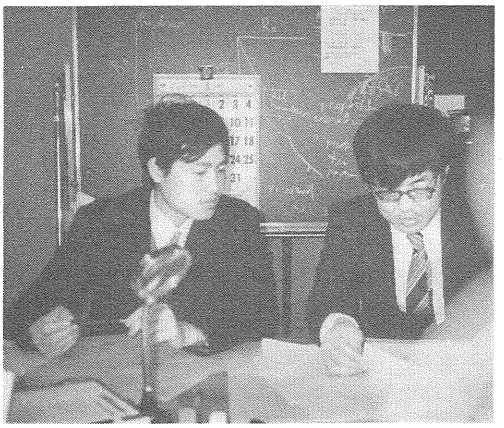


写真-3　データを整理・解析する王さん（右）と庄さん（中国・石炭特性）．　藤井技官提供．

前述のトルコ研究員が残した滞在費は　名取課長の協力により　最終年度となったフィリピンとのプロジェクトに華を添える形からも　もう1人のフェローを招へいすることで消化できました（渡航費は比側負担）．
BMG のエスピリツさん（Ernesto Espiritu）がその人で　1955年にフィリピン大学を卒業した古生物ヤさんです．　2月23日から3月13日まで　短かい滞在期間でしたが　本協力の実質的な研究活動は　1月初旬から約1か月間　名取課長が実施した在外研究をもって一応の終了を見ているため　エスピリツさんには関連機関の視察を含めて　来年度中に印刷を予定している最終報告書についての協議が主たる作業となりました．

（遠藤）

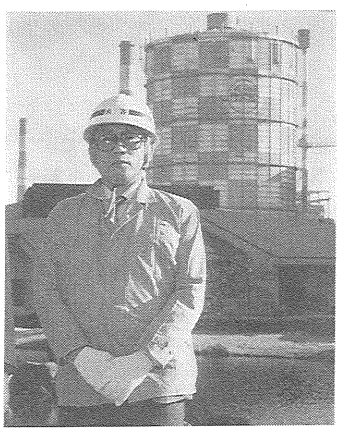


写真-5　工場視察中のエスピリツさん（フィリピン第2次）　日本鋼管扇島製鉄所にて名取技官提供．